

今年は、冬から早春まで、ひどい乾燥にみまわれたことが強く印象に残っています。その後、とても長く続いた梅雨も今年の気候の特徴で、日照不足や例年にない長い低温期が夏の始まりでした。そして、梅雨が明けると例年並みに、高温が目立ちました。

約半年で、これだけ激しく変化する日本の気候は、自然にとって、どれだけ過酷な状況なのかと心配になります。

今回はこれまで印象に残った自然の流れを紹介します。

1月



今年は、雨や雪が全くなく、その状況も3月まで続いたため、水不足が目立ちました。多摩川や秋川の湿地などが干上がり、動植物のサイクルにも影響が出てしまいました。

2月



毎冬ガンカモ類の個体数調査を行っていますが、今期の最大個体数は例年並み（ガンカモ類全種類で533羽／日）でした。強い寒波がきた2017-18年の冬（852羽／日）に比べ激減しました。

3月



トウキョウサンショウウオは、保全活動などが行われている場所では無事に産卵し、幼生の成長がみられましたが、やはり乾燥により全滅した産卵場所もありました。

この春確認したあきる野市内の産卵は2,243卵のうでした（一部情報提供含む）。絶滅の心配が続きそうです。

4月



比較的穏やかな時期である4～5月は、例外的な出来事はみられず、多くの動植物の「目覚め」や春の鳥の渡りなど、例年並みで、「自然の大イベント」が無事に行われました。（写真：盆堀地区の山々の様子）

5月



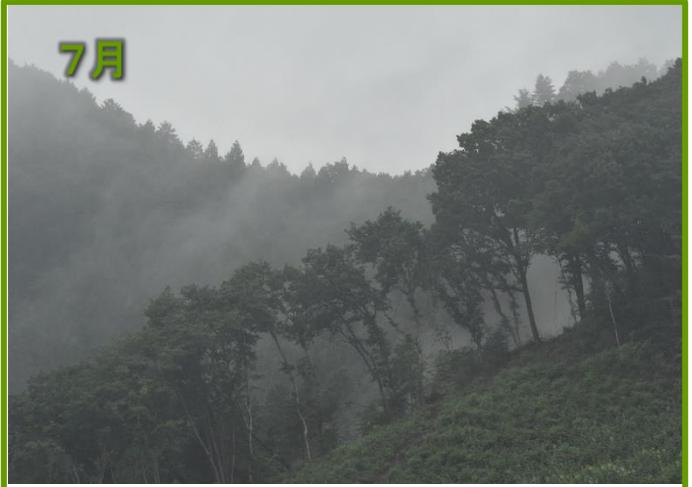
真夏よりも、この季節の方がたくさんの生き物に出会う機会が多いと感じます。晴れた日は昆虫から哺乳類まで、幅広く観察できます（写真：アケビコノハの幼虫）。今年の5月は、特に蛾（ガ）や蝶（チョウ）の幼虫が多かった印象。

昨年、あきる野市内の全てのオオタカのつがいは、繁殖に失敗しましたが、今年は、2つがいで合計3羽の巣立ちを確認しました。数は少ないですが、市内で減少がみられる種類の一つであるため、比較的希望が持てる結果でした。



6月

7月



今年の梅雨は雨の日が多く、明けるのも少し遅かったためか、とても長く感じられました。個人的に記録した梅雨の間にあきる野での雨の日は33日で、それ以外の日は基本的に曇りでした。低温や日照不足により、植物の実りなどに影響が出ることもあると思われます。(上写真: 深沢地区の山々の様子。下写真: 長引く雨に耐えるハンミョウ。多くの昆虫が例年に比べ少なかった梅雨でした。)



7月下旬、梅雨明けとともに活発化し始めた昆虫類は多く、アブラゼミやミンミンゼミは約2週間以上遅れて「夏のコンサート」を演奏し始めました。(写真: 飛び立つヤマトタマムシは嬉しそうに見えました。)



8月



秋の渡りがスタート。8月上旬から、今年生まれの野鳥を含め、繁殖地からの移動が多くなります。南下するサシバ(写真)も確認しました。



梅雨明けし、早速高温期に突入しました。猛暑日が続く、葉枯れが現れる植物も確認できます。今後は、台風の季節に代わり、自然の厳しさが増すことも考えられます。この先の季節は、心配と楽しみの両面があります。(2016年8月、増水中の秋川の様子)

激しい自然現象が起きやすくなっているように感じる現代は、人間と野生生物ともに大きな影響を受けますが、同時に、生きる力をとても感じられるのも、特徴的な日本の姿です。

